

新井白石の知識世界序説

李 梁

はじめに

江戸時代(1603-1868)を通じて、一介の儒者として政治に参与し、内外から高い名声を得たものは、新井白石(1657-1725)を措いてほかはまずいない。白石研究の第一人者だった宮崎道生が述べたように、白石は「学は和漢洋を兼ね、その学問を現実政治に活かし、近世後半期においては儒学諸流派のみならず、国学者・蘭学者にも多大の刺戟影響をあたえ、さらに近代に入って以後も学界に引き続き影響を及ぼしている点で、近世の学者思想家中、新井白石に匹敵する人物はいないと言ってよいであろう¹」。あえてその驥尾に附して少々敷衍すると、儒学者としては、白石の学識は同時代の殆どすべての学問領域に及び、かつその著述も

¹ 宮崎道生『新井白石の史学と地理学』、吉川弘文館、昭和63年3月、序論、頁1。

量質とも天下随一と言ってよい²。とりわけ際立ったのは、いわゆる鎖国時代の最中でも、彼は自ら西学に親しみ、『采覧異言』、『西洋紀聞』などといった西学の専門書を著わし、事実上、蘭学、洋学の開山とみなされるべき存在である。他方では、また長年侍講として君側に仕えながら、政治的幕僚(儒官)として、地方藩政から幕府の最高レベルの政治に直接参与し、数々の政策提言、政策の実行に凄腕をふるっていた。要するに、白石の生涯の作為を通じてみれば、どれも一種の時代を超越する開放性、真理概念の普遍性(例えば、彼の西学と西教への態度、史料④参照)、並びに合理主義の精神(例えば、彼の鬼神論、とりわけ史論、史料①②③参照)を表し、当時の日本のみならず、東アジア全域にお

² 新井白石は博学多才であり、生涯にわたる著述は、600余種に上がるが、大半散逸された。現存するのは100余種であり、殆ど今泉定介が編集、校訂『新井白石全集』(東京・吉川半七、1905-1907年)に所収されている。

いても、彼におよぶものはまずいと言いつつい。

一、先行研究と本文の狙い

ところが、その歴史的存在の大きさに照らしてみれば、今日では、白石は、萩生徂徠（1666-1728）や本居宣長（1730-1801）などの、いわば近世思想史の本流に必ずしも入っているとは言えない。それだけに、白石研究もまた、内外の研究者から重大かつ持続した関心を惹起したとも必ずしも言えないようである。ただし、こういった問題は、本論の主旨と直接に関連しないため、ここでは、あえてその因果論の討究を避けたい。³

さて、管見の限り、今日でも、白石研究の第一人者は、まず宮崎道生を挙げるべきであろう。彼による一連の研究は、殆ど白石の多岐にわたる学問分野と思想とを網羅しており、すぐれて示唆に富んでいる。⁴そして、日本以外の研究としては、量的にはそれほど多くはないが、次の代表的な数点を挙げるべきであろう。

Ulrich Kemper, *Arrai Hakuseki und seine Geschichtsauffassung: ein Beitrag zur historiographie japan in der Tokugawa-zeit*, Wiesbaden, 1967（『新井白石とその史観・徳川時代日本歴史編纂学への一つ貢献』）。

³ 萩生徂徠が『政談』において、殆ど白石を罵倒するほど激しく非難の矢を射たり、山片蟠桃も『夢の代』において、白石のことを嘲笑したりしていたことはよく知られるように、そもそも最初から近世本流の思想家の系列に白石が置かれていないであろう。村井淳志『勘定奉行萩原重秀の生涯―新井白石が嫉妬した天才経済官僚』（集英社新書、2007/2012）も、近年におけるそういった下馬評の延長線上にある論考のひとつだと思われる。

⁴ 宮崎道生による白石研究は、文末に附してある参考文献要覧を参照されるべし。

Kate Wildmab Nakai, *Shogunal Politics: Arrai Hakuseki and the Premises of Tokugawa Rule*, Harvard University press, 1988（邦訳は『平石直昭、小島康敬、黒住真ほか訳『新井白石の政治戦略：儒学と史論』、東京大学出版会、2001年）、周一良「新井白石論」（『周一良學術論著自選集』、首都師範大学出版社、1995年）。そのほか、新井白石の自叙伝『折たく柴の記』も、それぞれJoyce Ackroydによる英訳版 *Told Round a Brushwood Fire*（University of Tokyo Press, 1979）および周一良による中国語訳注版『折焚柴記』（北京大学出版社、1998年）がある。

目下では、新井白石関係の史料がもはや蒐集し尽くされたとは言えなくとも、新たな重大な発見がさほど望めないであろう。本論の狙いは、新たな史料の突破でも、白石の思想とその時代の贅論でもなく、和漢洋にわたる白石の知識世界が如何に構築されたか、言い換えれば、白石の知的生い立ちを多角的に辿りながら、検討を重ねようとするものである。なお、これと同時に、いわゆる思想的連鎖という視点より、白石という存在をほぼ同時代の東アジアの社会と思想的状況において比較検討を重ねて、十六世紀以降、「西学」に触発され再構築された近世東アジアの新知識体系の系列研究に、日本的ケースを加えようと企図するものでもある。⁵

⁵ 西力東漸による東アジアの社会と文化の変容に関する研究は、まさに枚挙に暇がない。こうした東西文化交流史、比較文化、比較思想といった視角からの既往研究に比べ、ここ数十年来、一種の新しい研究視角または方法論が際立っているように思われる。すなわち、それは、十六世紀以降、カトリック系諸修道会の宣教活動に伴い、従来の伝統的知識体系―たとえば、朱子学的な思维世界とその方法論―が大きく変容を来し、代わりに、一種の新しい地域的、またはローカルな知識体系が東アジア

二、江戸前、中期の社会と学問状況

慶長八年(1603)年2月、徳川家康(1542-1616)が京都伏見城で御陽成天皇より「征夷大將軍」の宣下を受け、江戸に幕府を開き、徳川幕藩体制を樹立してから、慶応三年(1868)、十五代將軍徳川慶喜が大政奉還までの265年間を江戸時代と称する。江戸幕府開府早々、「篤学の士」と言われた徳川家康をはじめ、歴代の將軍、大名は、徳川幕藩体制を補強するため、一連の制度(例えば「禁中並公家諸法度」、「武家諸法度」、「参勤交代制」及び厳しい身分制度)の制定のほか、また積極的に文教制度の整備、儒学とりわけ朱子学の奨励をはかった。還俗した朱子学者だった藤原惺窩(1561-1619)とその弟子格の林羅山(1583-1657)を擧用したのはその一例である。とくに林家の当主が、後に代々幕府の儒官を務め、五代將軍綱吉(1646-1709)の元禄四年(1691年)に至って、聖堂(孔子廟)を上野から湯島に遷った際、林家の私塾も一転して幕府附属の教育機関である昌平黌に変身し、遂に体制教学の中心となったほどである。

他方では、幕府はまた各地の大名に命じて、応仁以降、度重なる戦乱により散逸された古書を蒐集して保存をはかると同時に、『貞観政要』、『群書治要』、『吾妻鏡』といった政治支配に役立つ漢籍や和書の復刻刊行を着手させた。こうして時代の変化と学問の普及につれ、江戸中期に至って、林家の朱子学に対抗する形でいう特定の地域空間において形成されたとみるのは、それである。例えば、李天綱「十六、十七世紀東亜知識体系—徐光啓『海防迂説』与陸若漢の関係」(黄愛平、黄興濤編『西学与清代文化』、中華書局、2008年所収、265-277頁)は、そうした代表的観点のひとつである。

展開された儒学、たとえば山鹿素行(1622-1685)、熊沢蕃山(1619-1691)、山崎闇斎(1619-1682)、中江藤樹(1608-1648)、伊藤仁斎(1627-1705)、荻生徂徠などは古学または陽明学の立場を唱え、いわば御用の学となりつつある林家と違う理論的傾向を打ち出して、一時相当の盛況ぶりをみせていたのである。そして、幕府では、朱子学の正統性を維持し、封建的身分秩序社会とその教学を強化するため、つい寛政二年(1790年)に、かの「寛政異学の禁」を頒布するに至ったのである。

これと同時に、幕府は、更に昌平黌を官立の昌平坂学問所に改め、寛政異学の禁令の起草者である柴野栗山(1736-1807)など林家以外の朱子学者を抜擢し、旗本弟子、陪臣、浪人の教育に力を入れた。そうした気風のもと、各地の大名も相次いで文教重視の姿勢をみせ、とくに寛政期前後より先を争うように、各種の藩校⁷を開設し、弟子らに文武両道を兼修させたりしていた。また

6 「寛政異学の禁」の全文は以下の通り。

学派維持の儀に付申達

林大学頭之朱学の儀は、慶長以来御代々御信用の御事にて、已に其方の家代々、右学风維持の事仰付け置かれ候得ば、油断無く正学相励み、門人共取立て申すべき筈に候。然る処、近来世上種々新規の説をなし、異学流行、風俗を破り候類これ有り。全く正学衰微の故に候哉、甚だ相濟まざる事にて候。其の方の門人共の内にも、右体の學術純正ならざるもの、折節はこれ有る様にも相聞え、如何に候。此の度、聖堂御取締り嚴重に仰付られ、柴野彦介、岡田清助儀も、右御用仰付られ候事に候得ば、能々此の旨申し談じ、急度門人共異学相禁じ、猶又、自門に限らず他門に申し合わせ、正学講窮致し、人才取立て候様相心掛け申すべく候事。【徳川禁令考】⁷ 江戸時代を通じ開設された各種の藩校はのべ255ほどに及んでいる。その中には近代の各官、私立高等中学校の淵源をなすものが少なくない。蔵並省自、實方壽義共著『近世社会の政治と経済』、ミネルヴァ書房、1995年、127頁。

水戸藩主の徳川光圀（1628-1700）のようになり、『大日本史』の編纂事業を手掛け、加賀藩五代目の藩主の前田綱紀（1643-1724）のように、遍く天下の群書を尊経閣に蒐集し、新井白石をして「加賀は天下の書府」と感嘆させたほどである。そのほかに、各種の私立学校も漸次現れ、その中で最も象徴的なのは、大阪の懐徳堂（享保9年、1724年創立）である。懐徳堂では、程朱の学を本とし、兼ねて陸王を講じ、富永伸基（1715-1746）、山片蟠桃（1748-1821）といった町人思想家を輩出させ、いわば徳川中期以降、文教隆盛ぶりの象徴とも見なされた⁸。

三、新井白石、その人と学

恰も何か暗示されたように、新井白石が生まれたのは、丁度林羅山が逝去された明暦三年（1603年）年である。『白石新井先生伝』によれば、白石は、生まれながら「天質崎嶇、穎悟夙成、三歳時能書大字（優れた資質と理解力を持ち、三歳の時、既に大きな字を書くことができる）」といい、また「自少肆力於倭漢古

⁸ 管見の限りでは、江戸時代の儒学、つまり朱子学の日本社会における影響問題について、より前の世代の学者、例えば尾藤正英とその後の世代の学者、例えば渡辺浩、黒住真の間でかなり違うニュアンスを匂わせているようである。前者は儒学＝朱子学が徳川体制の正統な教学思想とみなし、後者はそれをただ一種の「ハイカラーな教養」とみて、少数の公家貴族や上層武士の階層にのみ好まれ、実際、江戸社会にはそれほど思想的影響がなかったとみている。それぞれ、尾藤の『日本封建思想史研究』（青木書店、1961）、『江戸時代とはなにか』（岩波書店、1992）、渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東京大学出版会、1985年、増補新装版、2010年）、『日本政治思想史「十七～十九世紀」』（東京大学出版会、2010年）、黒住真『複数性の日本思想』（べりかん社、2006）などを参照。
⁹ 『白石先生遺文』、前記『新井白石全集』第5巻。

今典故、慨然有以天下自任之志、而身際清明、得施其所蘊蓄、聲播於朝野、真可謂千載一遇矣。（中略）先生以博覽多識之力、精讀國史、其有可疑焉者、則或驗之人情、或參之漢史、故其論著大有裨於後學（幼いより和漢古今の典故に力を入れ、慨然として天下を自ら任じる志を有し、しかも潔白清廉にして、其の蘊蓄を施すことができ、名声を広く朝野に広がり、真に千載に一遇の（人傑）である。（中略）先生が博覽多識の力を以て、国史を精読し、その疑うところがあれば、則ち或いは人情に照らしたり、或いはこれを中国の史籍に参酌したりしている。その故に、その論著が大いに後学を裨益せしめることがある）、という。

周知のように、白石は、三十歳の時、幸運にも木下順庵（1621-1698）の門下生となる迄、殆ど独学である。彼の自叙伝『折りたく柴の記』の中で、その家庭的雰囲気と苦学ぶりがつぶさに追記されている。白石は、貧しい下級武士の出身とはいえず、「苦学不懈、通経史百家¹⁰」とされる。そして、家庭においては、「忍耐」をモットーとする「古武士」のような父正濟について、高い教養を積んだ母千代については、「我母にておはせし人は、ものよくかき給ひしのみにあらず、代々の集、または物語の類など、我あね・いもうとによみをしへ給ひ、囲棋・象碁なども堪能におはして、これらの事をも我にをし給ひたりき¹¹」というふうになり、幼い時から聡明伶俐な神童ぶりを顕した白石も、こうした家庭的雰囲気とも決して無縁ではなからう。

¹⁰ 同前

¹¹ 新井白石著、松村明校注『折りたく柴の記』（岩波文庫版、1999年）、55頁；周一良訳注『折焚柴記』（不僅長于書法、也傳習和歌之道、教我的姐妹讀歷代敎撰和歌和物語之類、也善下圍棋、象碁、並且教給我）、40頁。

幼少期のことはさておき、白石は、十七歳の時、偶々中江藤樹の『翁問答』¹²を読んではじめて儒学（「聖人の道」）に志し、「やがて小学の書を日夜に誦じ習ひて、業すでに畢わりぬれば、四書を誦じ習ひ、そのちまた五経をも誦じ習ひたれど、これら皆句読を授けし師にあるにもあらず、みづから韻会・字彙等の書によりて誦じ習ひたれば、後におもふに、ひがことのみぞ多かりける。文学の拙くして、書義を解する事の難きにくるしみて、学びのいとまあるおり々には、文章・詩賦の類をも学びしほどに、その年の十一月の比、冬景即事を七言律詩に賦しなしたり。これ、我詩作れる事の始也。ある人の其詩を評じける事あるを聞て、やがてその嘲を解く文一篇作りたけり。これ又、我文作れる事の始也」¹³、というように、その学問の世界に踏み入った経緯をつぶさに描かれている。

ここで言及された『韻会』とは、元の熊忠が著わした『古今韻会举要』30卷（1257年刊）を指す韻書である。『四庫提要・経部・小学類』に「援引浩博、足資考証」という評語がみえる。そして、『字彙』とは、明の梅膺祚が1615年著わした4卷の字書であり、後の『康熙字典』（康熙55年、1716年）も編集体裁上、殆どそれを踏襲しているという¹⁴。

すでに触れたように、白石は、三十才の時、木門に入るまで殆ど独学であり、また下級武士の出のうえ、二回も浪人の厳しい生活を強いられたために、勉学が必要とされる書籍は知人や学友か

¹² 前掲『折りたく柴の記』、70～71頁、周一良訳『折焚柴記』、48頁。
¹³ 周一良「新井白石—中日文化交流的body行者」、前出『周一良學術論著白選集』583頁。

ら借りるか自ら抄録するほか術がなかった。幸いに、学友の中に豪商川村瑞賢（1617-1699）の息子のような方がいて、書物の貸し借りが存分に行われたと考えられる。また結婚後、白石の奥さんの実家も結構の蔵書があり、それも存分に利用したと推測できであろう¹⁴。一般的にみて、白石は、むろん一介の儒学者であるが、しかしその読書の範囲は普通の儒者よりはるかに広い（恐らく日本に科挙制がないのも幸いなこと）。これは残存する彼の抄録書目からもその一端を知ることができる¹⁵。例えば、経子類に『韓詩外伝』、『大戴礼記』、『孔叢子』、『十一家注孫子』、徐幹『中論』、集部類に六朝詩、李白詩、古文抄録、佳句抄録、陳子龍『皇明詩選』、『文苑英華』抄、『宋文鑑』抄、そしてとくに注目すべきなのは、中に仏教類の『宋文憲公護法録』および養生飲食類の『燕閑清賞』（明人高濂の『遵生八箋』の一部分）などもある。

ところが、すぐれた史論や史眼を以て知られる白石は、どういう訳か、その抄録書目に史部の典籍だけが意外にも見当たらない。ただ明の陳侃『使琉球録』、馬欽『瀛涯勝覽』があることは、彼のアジアの歴史地理への関心度の高さを現していると見てとれる¹⁶。なお、抄録書目に、明代でかなり広く読まれている類書『圖書編』（127卷）の一卷もある。著者の章潢（1527-1608）は、か

¹⁴ たとえば、白石には次のような「読書詞」があり、その読書観、つまり学問観の一端を知ることができて興味深い。「貧家読書子、常苦少蔵書、富家読書子、常苦多蔵書、貧富二家子、少長讀一書、所見還淺深、（中略）読書行之始、故要博涉書、君子百行者、不愧所読書、読書能若此、始為能読書、為告読書人、尚其能読書」（白石先生遺文拾遺）『新井白石全集』第五、73頁。
¹⁵ 前出宮崎道生「新井白石の研究」附録「新井白石関係文献総目」をみよ。
¹⁶ 同注13。

て白鹿洞書院の山長の時、南昌滞在中の高名なイエズス会宣教師マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 中国名は利瑪竇、号は西泰、又の号は清泰、西江、1552-1610) とも親しく交遊し、リッチを白鹿洞書院に招いて西学を説いたことすらあるという人物である。

『図書編』に「日本国図」も収録され、西学からの影響は随所にみられる類書である¹⁷。さらに、白石の学問観、ないし世界観を考察するうえで興味深いのは、次の三種の漢籍の抄録である。

それはつまり、マテオ・リッチの『万国集説』一卷、方以智(字は密之、号は曼公、1611-1671)の『通雅』二巻と『物理小識』十巻(全十二巻の中で十巻を抄録したこと自体、白石のこの書物の重視度がわかる)である。当時、鎖国の最中で、マテオ・リッチをはじめとするカトリック関係の書籍がすべて禁書扱いされ、厳重に取り締まる対象となっていたのは、周知のことである。こういう時勢の中、あえてリッチの書籍を抄録するという行為自体から白石の識見の高さ、並びに度胸の凄さが窺い知ることができらるだろう。なお、白石は、「考拋精核」(『四庫提要・子部・雜家類』)とされる『通雅』、様々の自然現象を原理的に探る『物理小識』をこよなく愛読し、その実証的、合理的(科学的)な学風の確立に大いに役立ったものだと考えられる。

要するに、白石の独学時代、木門入門後の学問研鑽、そして甲府藩主徳川綱豊(1662-1712)、後の六代目将軍家宣の侍講として進講した内容を総合してみれば、彼の漢学知識は、いわば、経史

¹⁷マテオ・リッチと章潢の関係について、夏伯嘉「利瑪竇與章潢」(田浩編『文化與歴史の追索：余英時教授八秩壽慶論文集』、臺北市、聯經、2009年)に詳し。

を主とし、子集並びに小学の知識を副とするものであったと言える¹⁸。

四、新井白石の漢学知識

日本において、いわゆる漢学とは、まず漢文学、つまり漢土かんとの中国から伝来された漢詩、漢文のことを指し、今日学界で通用する Sinology または Chinese Studies に対置する中国語訳の概念術語ではない。それはともかくとして、ちなみに、日本の漢文学は非常に長い歴史を有する。最も古きは、紀元四、五世紀に遡ることができる。当時、大陸から古典詩文や小学などの書籍が伝来され、それらは、いわば漢文学の嚆矢となったのである。更に、奈良、平安朝に至って、漢文学が律令制官人の必須の教養とされていた。十三世紀から十五世紀にかけて、東福寺開山の円爾(1202-1280)、建長寺開山の蘭溪道隆(1213-1278)、円覚寺開山の無学祖元(1226-1286)などの留宋僧、帰化僧の活躍、推進もあって五山禅林の漢詩文をはじめ、漢文学がまた一時の隆盛ぶりをみせていたが、室町時代後期より戦国時代に突入し、戦乱が絶えず、漢文学も次第に衰退の一途を辿るようになった。漸く江戸時代になつてはじめて状況が一変し、新たな漢文学ブームが沸き起こつたと言えよう。江戸時代の儒学、とりわけ朱子学が基本的に上述

¹⁸尤も新井白石が質量とも江戸時代における代表的漢詩人の一人であったということ忘れてはいけない。これについて、新井白石編『停雲集』(二巻二冊、享保3年刊)と『木門十四家詩選』(三巻三冊)(いずれも板倉勝明編『甘雨亭叢書』)の巻別集の巻、『新井白石全集』、佐野正己他編『詞華集日本漢詩』全二巻、汲古書院、1983年)、一海知義、池澤一郎(日本漢詩人選集5)『新井白石』(研文出版、2001年)、紫陽会『新井白石「陶情詩集」の研究』(汲古書院、平成24年)を参照すべし。

の五山漢文学の土台の上で新たに生まれたといつてよい。江戸初期、禅僧から還俗された儒学者の藤原惺窩(1561-1616)、並びにその弟子格の林羅山(1583-1657)は、いずれも濃厚な五山文学の匂いを漂わせていたのは、周知の如くである¹⁹。

そうした意味で、本稿でいう漢学とは、主として儒学、又は朱子学の宇宙論、ないし方法論を内包する膨大な知識体系としての「経学」と言い換えてもよい。そして、房徳隣が整理したように、孔子が修訂したといわれた「六経」(『詩』、『書』、『礼』、『楽』、『易』、『春秋』)、あるいは「六芸」(礼、楽、射、御、書、数)という知識内容を内包する経学は、政治権力の庇護もあつて、長い歴史の中で、膨大な知識体系として確立されるようになった。そこには、三つの層面が含まれている。1つ目は、義理の探求であること、現代の哲学、倫理学に相当する。2つ目は、経書理解に必須の補助的学科、例えば、言語文字学、文献学、歴史学、天文地理学、数学などである。3つ目は、経書に言及された各種の学問と技能のこと。総じていえば、経学の知識体系は膨大で複雑であるとはいえ、その基本的構造は、案外、簡単明瞭である。それは、つまり、「内聖外王」である。経学の知識全般は、そういう「内聖」と「外王」という二つの側面に凝縮され、表象されると言つてよい²⁰。

ところで、かつて御書物御用として各地の和漢書籍の蒐集に力¹⁹これについて、最新の研究成果を取り入れつつ、簡明にして要を得たのは、小島毅監修、島尾新編『東アジアのなかの五山文化』(東アジア海域に漕ぎだす4、東京大学出版会、2014年)に詳しい。

²⁰房徳隣「西学東漸与経学的終結」(朱誠如、王天有主編『明清論叢』第二輯所収、紫禁城出版社、2001年3月)参照。

を入れ、またしばしば主君より貴重書物の下賜を受けたりした白石は、その知識構造が明らかにそうした経学の枠には収まりきれない、とみてよいであろう。彼は、倭漢古典籍または出土文物に深い造詣をもっているのみならず、アジアないし世界の天文、地理、医学など、いわば科学技術の面にも強い関心を寄せ、相当深い理解と造詣とを有するからである。白石が学問の世界においても、政治の場においても、常に見せていた開放的かつ合理主義的な精神も、そうした広い教養と知識と無関係ではないであろう。

むしろ、現実には白石は侍講として君主政治を補佐するため、大抵『周礼』、『書経』、『四書』、『詩経』など制度論的な経書、または『通鑑綱目』、『通鑑統篇』、『春秋四伝』(三伝、胡氏)といった歴史的教訓や支配原理に役立つ史籍を珍重していた。なお白石は、主君(甲府藩主徳川綱豊つまり後の六代目將軍徳川家宣)から厚い信頼を受け、延べ十九年の長きにわたって講義出仕を全うし、事実上、単なる一介の侍講でなく、將軍の高級ブレーンとして直接間接的に幕府の最高政治に親しく参与していたのである。一方、白石が主君のリクエストに応じて、たとえば『藩翰譜』、『読史余論』、『古史通』および『古史通或問』などのように、すぐれた史眼または史観をもつ歴史書を次々とものにしていた。伊豆公夫の言葉を借りて言うならば、『藩翰譜』は白石の史書体系の上で近世史に当たる。『古史通』などが古代史、『読史余論』が織豊時代に至るまでの武家政権の興廃を述べた中世史、そして『折りたく柴の記』が現代史にあたる²¹。いわば、最も白石の合理主義的精神を顕に示したのは、その歴史研究、とりわけ古代史

²¹伊豆公夫『新井白石』、204頁。

の研究においてである。その意味で、大著『史疑』が散逸して伝わらないのは、誠に残念としか言いようがない。²²

ここで、詳論を避けたいが、彼の方法論上の特徴としては、次の幾つかを取りあげることができる。²³ まず史料に対する合理的、批判的精神をもつことである。たとえば、記紀などの古代史料をそのまま額面通り受け取らず、取捨分析してどれが史実なのか見極めようとしている。神の世界に人間的な理解を持ち込んだのは、彼に遅れて登場した本居宣長や平田篤胤等よりも優れていると言えよう。第二に、その合理主義的認識は、比較言語学、比較文献学的分析に立脚していること、第三に、比較史的、世界史的方法を持ち込んだことである。『魏志』、『後漢書』、『三国志』など中国、朝鮮の史籍と日本古代史資料と比較して、正しい史実の認識に努めようとしていた。こうした方法論は、彼の西学研究、たとえば『西洋紀聞』などにおいても、同様に活かされている。²⁴

五、新井白石の西学とそのルーツ

歴史教科書では、通常、杉田玄白（1733-1817）が蘭学の開山だとされている。確かに、杉田らの『解体新書』（安永3年、1774年刊行）は日本史上初の本格的な西学訳書だったと言える。²⁵ だが、鎖国時代における西洋理解の制限があったにもかかわらず、

²² 史料2参照。

²³ 前出周一良、伊豆公夫などの研究を参照。

²⁴ 史料1、3、4参照

²⁵ ちなみに、周知のように、『解体新書』の原書は、もともと独語だが、杉田らがオランダ語版から漢文に訳出されたのである。多くの訳詞、例えば、軟骨、神經、門脈、睪臓などに漢文の対応詞がなく、杉田らの独創によるものである。

白石の西学関係の著書は前述した『西洋紀聞』、世界地理に関する『采覧異言』のほかに、宮崎道生の研究²⁶によれば、さらに散逸した類似の著書『阿蘭紀事』、『阿蘭陀考』、および『西学推門』、『西洋人物集』、『西学年略雑著遺考』（新井家「先祖書」）、『西洋図説』、『西学考略』（堤朝風「白石先生著述書目」）などもある。注目すべきなのは、『阿蘭紀事』、『阿蘭陀考』がいずれも白石晩年の著作であり、オランダの人文地理に関する体系的な専門的著書である。それに、白石がかつてオランダ語を学んだことがあるという事実からみて、彼が日本蘭学、または洋学の開山と称しても決して過言ではない。

さて、『西洋紀聞』と『采覧異言』からみれば、白石の西学知識が今日の人文社会科学の範囲を出ないと言えるが、しかし禁教勅令の鎖国時代において、これほど体系的な西学知識を有することも、又極めて異例であると言わねばならない。とくに白石の西学知識は、実はこれに限らず、また彼の人文地理知識ほど体系的がないとはいえ、広く自然科学の多くの領域に及んでいたのである。以下、先人の研究を踏まえながら、その大要をかいつまんで述べてみたい。²⁷

1. 天文学暦学

『西洋紀聞』の記録によれば、日本に潜入したイタリア人カトリック宣教師シドッチ（Giovanni Battista Sidotti, 1668-1714）を尋問した時、白石は、シドッチが太陽の位置と自身の影によって時間が計れることに大いに感服したという。だが、前述したように、

²⁶ 詳細は参考文献1、3、7の関係論述を参照する。

²⁷ 同前。

実は、白石のそういった領域の蓄積は、早く梅文鼎(1633-1721)の『暦学疑問』、遊子六『天経或問』、あるいは方以智(1611-1671)の『物理小識』などすぐれて西学の影響を受けた著書から得ていたのである。こういった経緯は『西洋紀聞』、『采覧異言』、および『日記』に断片的に言及され示されている。

2. 物理学

天文学知識と同じく、白石がこの領域においても、シドッチに「企及ぶべしとも覺えず」と素直に兜を脱いだ。その著書『錦芥抄』および『外国通信事略』に付録した「外国お土産」において、雨水の長短、勝眼鏡、コンパス以外、また磁石、潮汐の干満ないし火繩銃に関する細かい記述があると認められる。

3. 生物学

白石は生涯にわたって旺盛な知識欲や知的好奇心をもっていた。彼は、自分の特殊な地位を活かして、幾度も將軍謁見のため、長崎から江戸に来たオランダ商館長と面会し、動植物などの問題について、オランダ人に教えを聞いたり、また朝鮮および琉球からの使節に対しても、同じく様々な質問をしたりして、絶えず多くの新しい知識を得ることができたわけである。

4. 医学

白石が幼少期に天然痘に罹り、西洋の薬の服用によって漸く一命をとりとめた。この経験は、恐らく後にある程度彼の西洋医薬への信頼と繋がったと考えられる。次男の宜卿が病に伏した時に、オランダ商館長とともに江戸にやってきたオランダ人の外科医に病状をみてもらったのはその一例であろう。むしろ、漢方医が圧倒的な地位を誇り、せいぜい細々と受け継がれている南蛮流

の外科しかない時代、白石の医学の理解も自ずとかなり限られており、彼の著書に幾つかの西洋薬品名の記録が見られるほどである。

すでに多くの指摘があったように、白石の西学知識とその理解は、主にイタリア人宣教師シドッチへの数回にわたる尋問、およびオランダ商館長への複数回の質問が決定的である。これは、むしろ事実であり、基本的な間違っていない。しかしながら、前述した方密之、梅文鼎および徐光啓などの西学影響を受けた著書以外に、白石がその特別の地位を活かして、鎖国時代、禁書扱いの漢訳西学書を読んだ可能性も否定できない。これは、今後、彼の著書、および同時代人の著書、書簡などを綿密に点検して掘り下げるべき課題でもある。なお、詳しい記録が乏しいが、もうひとつルートは、木門の同門を含めた広い交遊関係を通して構築されたある種の知のネットワーク例えば、木下同門の雨森芳州(1668-1755)、八代目將軍の侍講となった室鳩巢(1658-1734)、および家宣の侍医桂川甫筑(1661-1747)などを活用したと考えられる。これも、今後、さらに掘り下げるべき問題である。

六、終わりに代えて

近年、筆者の関心が主として16世紀末から18世紀半ば迄の、広義的な明清交替期における東西文化の往還運動の歴史的意義の探求にある。言い直せば、いわゆる大航海時代の到来とともに、イエズス会をはじめとするカトリック諸修道会による東アジア諸国の布教活動は、当地固有の伝統的な知識体系―知識構造・価値観・認識論―の動揺をもたらし、日本の国学、神道学、中国清代

の考証学、東アジア三国の実学のように、従来の枠組で捉えきれない新しい学知とその方法論の発生を誘発し、また相当一部の知識人に対外観、又は世界観の変容をもたらしたと思われる。しかし、そういった歴史的事象をいかに史実の裏付けをもって浮き彫りにし、丁寧の説明していくべきか、と問われるだろう。その答えを求めるため、筆者は、それぞれ徐光啓(1575-1632)、新井白石(1657-1725)および洪大容(1731-1783)とごう時代の前後あるものの、ほぼ同時代の東アジアを代表するといふべき知識人を取り上げ、いわゆる西学という新知識によって、いかに彼らの伝統的な知識観、自然観ないし対外観の変化を来したのかを検証しようとするわけである。

本稿では、新井白石を取りあげ、主として彼の漢学と西学を中心に、その知識世界の一端を垣間見ることにしただけである。白石の知識世界の全体像を描くには、江戸時代第一級とも言われる彼の詩文を含め、和漢洋にわたるその膨大な知識を集めた全集を更に読み込み、分析、整理していかなければならない。これらは、今後の課題として更に追求していきたいと思う。

主な参考文献

一次史料

1. 今泉定介編輯、校訂『新井白石全集』丁5巻、明治三十八年(非売品)、国書刊行会新版、1977年。
2. 桑原武雄編(日本の思想13)『新井白石集』筑摩書房、1970年。
3. 新井白石、室鳩巢著『新井白石集・室鳩巢集』、大日本思想全集刊行

會、1933(大日本思想全集6)。

4. 東京大学史料編纂所編纂 大日本古記録『新井白石日記』上下、岩波書店、昭和二十八年。
5. 家永三郎ほか編『日本思想大系35』『新井白石』、岩波書店、1976年。

二次資料

1. 宮崎道生『新井白石の研究』増訂版、吉川弘文館、1969年。
2. 宮崎道生『新井白石の現代的考察』、吉川弘文館、1985年。
3. 宮崎道生『新井白石の史学と地理学』、吉川弘文館、1988年。
4. 宮崎道生『新井白石の時代と世界』、吉川弘文館、1975年。
5. ケイト・W. ナカイ著・平石直昭、小島康敬、黒住真訳『新井白石の政治戦略・儒学と史論』、東京大学出版会、2001年。
6. 栗田元次『新井白石の文治政治』、石崎書店、1952年。
7. 宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』、吉川弘文館、1973年。
8. 勝田勝年『新井白石の歴史学』、厚生閣、1939年。
9. 杉浦明平『ほか』訳『新井白石・本居宣長』(改装版) 河出書房新社、1979年。
10. 宮崎道生『新井白石の人物と政治』、吉川弘文館、1977年。
11. 一海知義、池澤一郎『日本漢詩人選集5新井白石』、研文出版、2001年。
12. 紫陽会編『新井白石「陶情詩集」の研究』、汲古書院、平成24年。
13. 伊豆公夫『新井白石』、白揚社、昭和十三年。
14. 黄俊傑著、藤井倫明訳『東アジアの儒学・經典とその解釈』、ぺりかん社、2010年。
15. 黄俊傑主編『東亜儒学・經典与詮釋的辯正』、華東師範大学出版社、2012年。
16. 黄俊傑主編『東亜文化交流中的儒学經典与理念・互動、轉化与融合』、華東師範大学出版社、2012年。
17. 黄俊傑主編『東亜朱子学的詮釋与發展』、華東師範大学出版社、2012年。

- 18 井上克人、黄俊傑、陶徳民編（日本文学研究叢書9）『朱子学と近世・近代の東アジア』、国立台湾大学出版中心、2012年。
- 19 岩崎允胤『日本近世思想史序説』上下、新日本出版社、1997年。
- 20 渡辺 浩『近世日本社会と宋学』（増補新装版）、東京大学出版会、2010年。
- 21 ——『日本政治思想史 十七～十九世紀』、東京大学出版会、2010年。
- 22 伊東貴之『思想としての中国近世』、東京大学出版会、2005年。
- 23 小島毅『中国近世における礼の言説』東京大学出版会、1996年。
- 24 ——『宋学の形成と展開』、創文社、1999年。
- 25 季刊『日本思想史』、46号、ペリカン社、1995年12月。
- 26 佐々木力『江戸のピュタゴラス主義―新井白石から佐久間象山まで―』上・下『思想』第一〇四―二二号（2011年12月）

謝辞

本研究は、JSPS 科研費23520093および国文学研究資料館 日
本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業の一環で
ある「日本と西洋との相互認識に関する総合書物学的研究…キリ
シタン文学の発展と継承」（研究代表 郭南燕）共同研究プロ
ジェクト（平成26年度―平成29年度）の助成を受けたものです。
なお、本稿は、国際日本文化研究センター（京都）共同研究班
『心身/身心』と『環境』の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討
とその普遍化の試みとして』（研究代表 伊東貴之）平成26年5月
10日）にて口頭発表したレジュメを加筆して成したものである。

史料（すべて前掲『新井白石全集』に拠る）

① 佐久間洞蔵 宛 享保九年（一七二四）一～二月

水戸に出来候本朝史などは、定て国史の訛を御正し候事とこそ頼もしく存候に、水戸史館衆と往来し候て見候へば、むかしの事は、日本紀、続日本紀等に打任せられ候体に候。それにては中々本朝の实事はふつとすまぬ事と、僻見に候やらむ、老朽などは存じ候。

本朝にこそ書もすくなく候へども、後漢書以来、異朝の書に本朝の事しるし候事共、いかにも〳〵げんかんのおぼや実事多く候。それをばこなたに不吟味にて、かく異朝の書の懸聞之訛と申しやぶり、又は、三韓は四百余年本朝の外藩にて、それに見へ候事にもよき見合せ候をも、右の如くにやぶりすて候。本朝国史〳〵とのみ申す事に候。まづは本朝の始末、大かた夢中に夢を説き候やうの事に候。老朽史疑、せめて日本紀に見へ候時代迄の事濟候ても、よほど実録の心得にはなるべく候歎と存候へども、成否は天に任し候より外になく候。

② 佐久間洞蔵 宛 享保九年（一七二四）春

今度、史疑の神代系記の中には、あらあらそれらの事にも及び候。抛今はなはだ驗古候事は、事にはより候へども、如此かゝるの事は、大きにゆきちがひある事に候。古を論じ候には、我身を古に置き候て、古の時を以て古の事を論じ候では参らぬ事に候。去年やらむも水戸の衆へ、魏志に候倭国の国名はいかにとたづね候へば、伝聞の訛と見へ候て一所も存寄無之由たれなきよしに候き。老拙見候ては、しれ候はぬは五六ヶ国も候か。不残たしかに当時も候所々に候。此魏志

は、其時に彼国の使往来候て、見聞の及び候所をしるし候故に、里数戸数迄もたしかにて、けく こなたの今日が伝聞の訛にて、魏志は実録に候。如此の所が古学の益ある事にて、第一の要に候。

日本紀などは、はるかに後にこしらへたて候事故に、大かた一事も尤らしき事はなき事に候。地名などは、種々むかし人のかたはし申伝候事共をしるしたて候故に、地理にたがひ候事共候。某史疑の作はこれらのための物に候。すでに天武天皇の、旧事紀はいつはり多く候とて、御改候はんとの詔候処に、崩御にて其書功成り候はぬに付て、古事記は勅撰にて、旧事とはよほどゆきちがひくし候て、いかにも実録と見へ候共多々有之候。殊に、異国の史、三韓の国史に引合せ候に、ひたと合ひ候ものに候。此書などを、世にはなにもなきやうに心得候事、よく不学之事やと被存候事に候。

③佐久間洞巖 宛 発信年月未詳

石鏃三ツ、さてくめづらしく忝奉存候。此物の事は本朝の国史にも二所か三所見へ候。某方にも、鹿島の浦、出羽由利郡、能登珠洲郡より出候と、此たび被下候と、合せて十に罷成候。南部に居候親類共よりも、南部のものを可遣候と申約し候。又々可仕候。

此物、俗間に申す神軍の矢の根にて候。きはめてふるきものに候。すなはち、書経に候箸、孔子家語、国語などに候石箸にて、肅慎国のものに候。すでに国史にも、肅慎国のものに佐渡に入犯し候事も候。蝦夷地より入犯の事も候。次に、壺碑に靺鞨国への道程も見へ候。靺鞨は古肅慎の地にて候。天平の頃迄も、本邦より

の往来通路たしかに有たると見へ候。太古の時に彼国のものども入犯し候はいふに及ばず、東奥、常陸、又は越後の地に盤抛し候て、度々の軍も候を、俗に神軍とは申伝たるに候。其軍有之候時にかち得候て、かの軍仗を掘り埋め、又は塚などにし候が、急雷雨の時にた、き出され候を、国史には降り候と心得候てしるし置れしと見へ候。仮初にも西南地方になきものに候を以ても、弥以て肅慎の楛矢、石箸、孔子の御覽及ばれ候ものと存じ候へば、弥生の物に候。

神武を以て本朝人王の始とし、国史に見へ候所を拠とし候ても、わづかに周の末世にあたり候。あなたにては、其よりさきに殷、夏、猶それよりさきに三皇五帝、いかほども候て、泰山に封禪の君七十二代の中、管仲聞及ばれ候十代、孔子はそれより少し多く聞思及ばれ候と、史記封禪書にも候へば、異邦にても、太古の事は聖賢もしろしめされぬ事いくらも候と見へ候。

これを以て見候へば、神武より以前の日本の代、いかほども神代にて聞も及ばぬ候べく候。其証には、国史に見へ候所に、能登、近江、遠江、其外の国々よりも、地中より鐙をほり出し、高さ三尺、径一尺のものいくらも候。これはとかく人の細工にてこしらへ候ものにて、神代以来、さやうのもの此国に用ひ候とは見へず候。聞も及ばぬ神代に、それらの道具入りたる世こそ候事と見へ候ひつらめ。況や神代と申す世もよく吟味し候は、二三百年も遠き代のやうに書なされ候事と見へ候、実は周末、秦の始に相当るべく候。

畢竟、皇統をたて候はんとて、それよりさきの事は申消し候て、

神代とまぎらかし候と見へ候。しからは、神社などの類の本縁たぐひ、しられぬ事いくらも可有これあるべく之候を、見候事のやうにきはめ候はんは、君子のあるまじき事、疑は疑を伝ふる聖言に大きにたかひ候べく候。たゞ少も抛よせのたしかに候事を以てきはめたものと、愚存は存寄候迄に候。以上

④『西洋紀聞』

イ、凡そ、其人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文・地理の事に至ては、企及くわてきぶべしとも覺えず。

ロ、其教法を説くに至ては、一言の道にちかき所もあらず。智愚たちまちに地を易かへて、二人の言を聞くに似たり、こゝに知りぬ、彼方の学のごときは、たゞ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず。

ハ、前代の御時に、某申せし事もあれば、今此事をしるす事凡三卷。初には、此事の始末をしるして、長崎奉行所より注進せし大略をうつして附す。中には、其人のいひし海外諸国の事共をしるす。終には、某問ひしに、答へし事共の概要をしるす（西洋紀聞 上巻）。

ニ、今エイズスが法をきくに、造像あり、受戒あり、灌頂くわんとうあり、誦經ずきやうあり、念珠あり、天堂地獄・輪廻りんね報応ほうおうの説ある事、仏氏の言に相似ずといふ事なく、其浅陋の甚しきに至りては、同日の論とはなすべからず。明季めいきの人、其国の滅びし故を論ぜしに、天主の教法、其一つに居れり（西洋紀聞 下巻）。